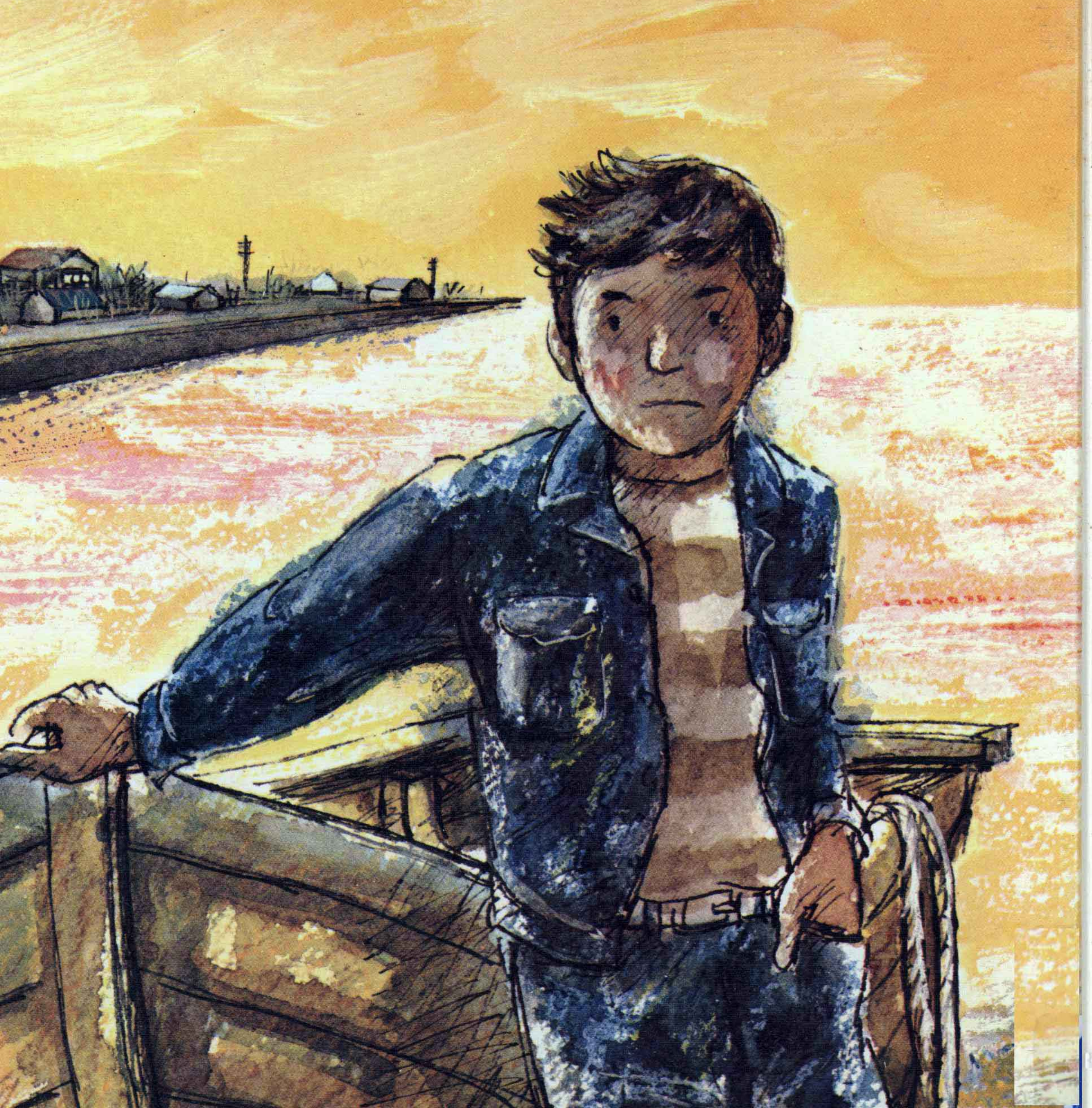
# 海が遠くなる町で

石井昇悟・作　田中秀幸・画



海が遠くなる町で

創作こどもらいぶらり12

1974年7月／発行©

著者／石井昇悟

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社**金の星社**

〒111 東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03－861－1506(代表)
振替／東京64678

写植／松竹写植
製版／株式会社ユニプロセス製版社
印刷／熊谷印刷株式会社
製本／株式会社小林製本所

乱丁落丁本はおとりかえいたしますので，お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 石井昇悟
海が遠くなる町で

金の星社 1974
85P 22cm

基本カード記載例

8393－033121－1406

創作こどもらいぶらり 12

# 海が遠くなる町で

うみ　とお　まち

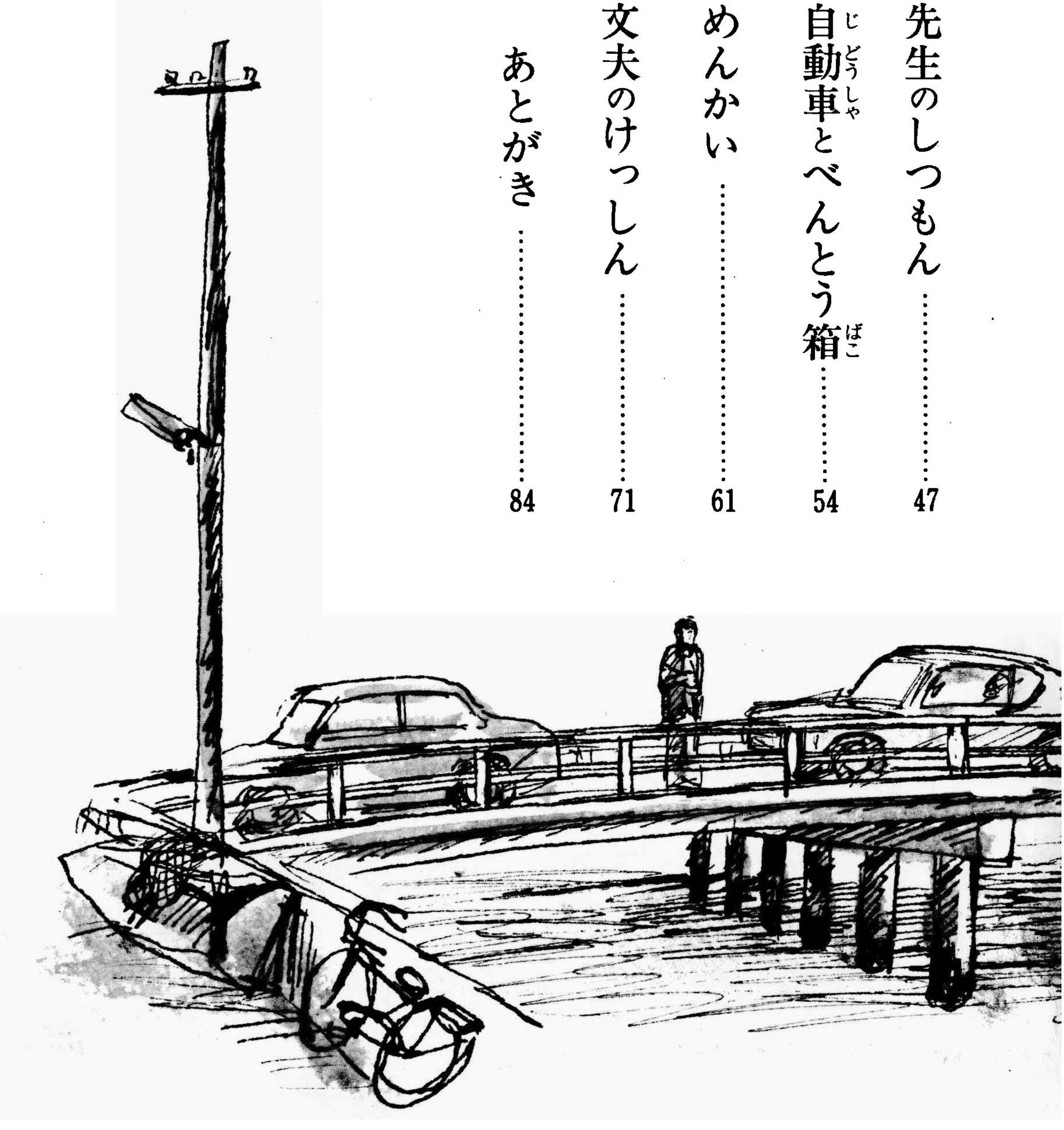
石井昇悟・作　田中秀幸・画

もくじ

──海が遠くなる町で

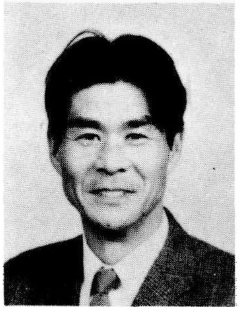
どんぐりボス……8
せいそう屋さん……14
ねえちゃん……23
かっこわるい父……30
大きなじけん……39

先生のしつもん……47
自動車(じどうしゃ)とべんとう箱(ばこ)……54
めんかい……61
文夫のけっしん……71
あとがき……84



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

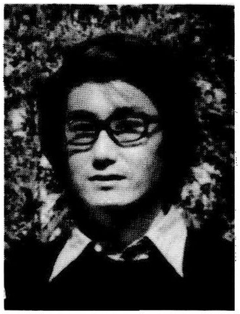
**石井昇悟**（いしいしょうご）



一九二四年、千葉県に生まれる。本名・石井安次郎。一九五八年頃より、主として歴史小説を執筆。中篇「僧と賊と」ほか数十篇発表する。著書に創作児童文学『流れ星はきえない』（金の星社）などがある。同人誌「今日の会」所属。木更津市役所勤務。

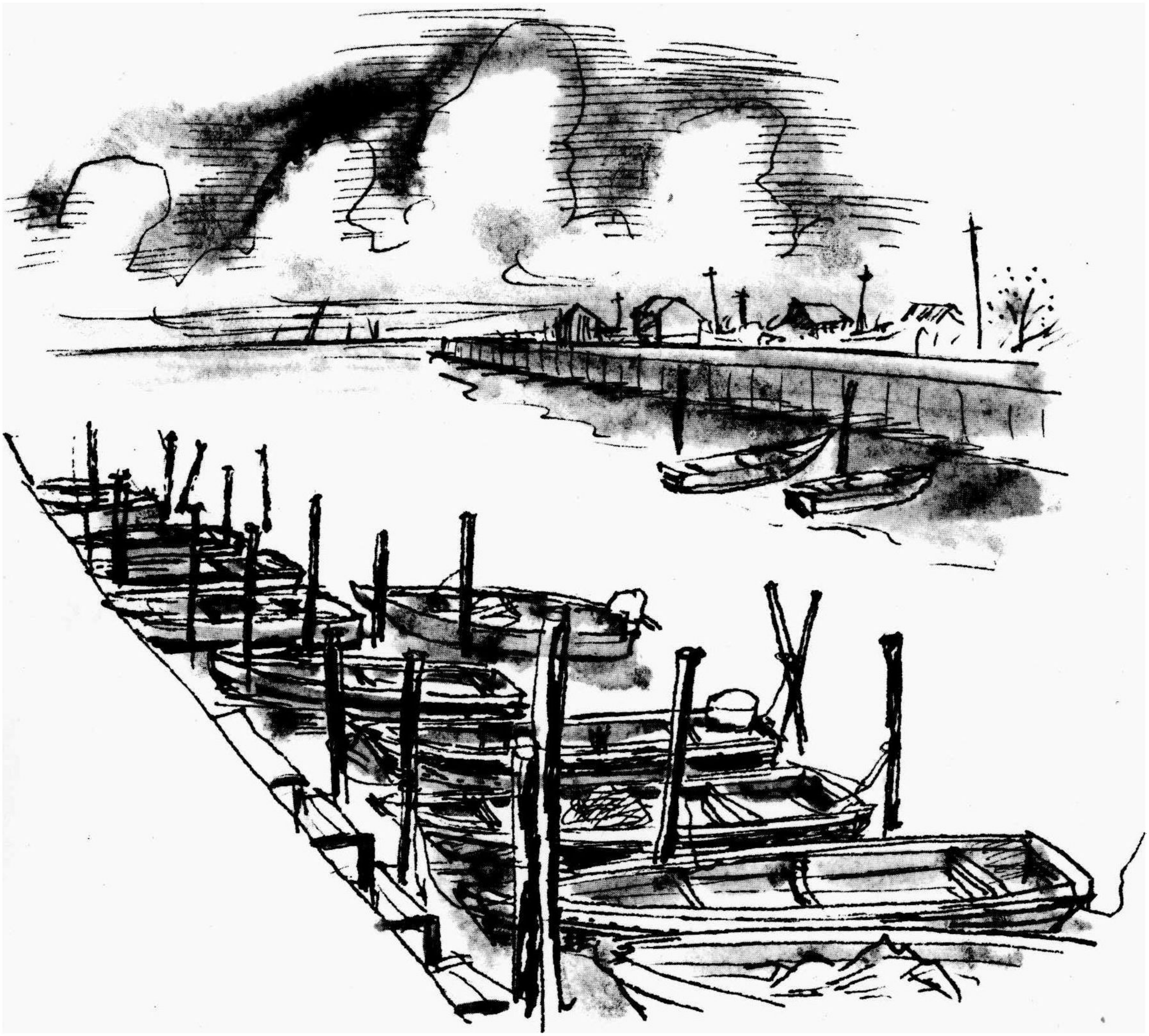
現住所・千葉県木更津市貝淵一三二番地

**田中秀幸**（たなかひでゆき）



一九四〇年、東京の下町に生まれる。光風会美術研究所に学び、職業をいろいろ経験した後、一九七二年より児童図書の装幀・挿画に専念し、出版界で活躍中。主な仕事に、月刊絵本『あかいゆき』『おにのこま』（すずき出版）などがある。

現住所・東京都北区浮間三～四～十一～五〇六



# 海が遠くなる町で

# どんぐりボス

「いいか、三人とも。学校のどうぐをおいたら、いつもの、水門のわきさ集合だど。」

文夫は、友だちのつね平と久作に、命令するようにそう言うと、自分は、もう肩からかばんをはずしながら、いちもくさんに、家へむかってかけだして行きました。三人は、これから、海岸のうめたて現場へ、あそびに行くやくそくをしたのです。

文夫たちの住む、この町の海岸からは、つい三、四年前まで、毎年たくさんの、のりがとれていました。

冬になると、家のまわりの田んぼや畑には、見わたすかぎり、のりをほすサクが、いくえにもいくえにも立ちならび、文夫たちはよく、そののりサクのかげで、かくれんぼをしたものです。

でも、いまでは、そののりサクは、ほとんど見

あたらなくなりました。工場や川から流れでる、よごれた水や、船などからでる油で、海水が、すっかりよごれてしまい、そのために、多くの人が、のりをとるのを、やめてしまったからなのです。

　のりのとれなくなった海岸は、うめたてられることになりました。そしてうめたててできた広い土地には、どこからか、つぎつぎに大きな工場が、ひっこしてきました。

　文夫が、小学校に入学した年まで、海はすぐ目のさきにあって、すこし風の強い日など、波しぶきが、庭の中までとんできたものです。けれど、いまそこには、灰いろの大きな鉄工所ができて、毎日キリキリリと、耳をおおいたくなるような、そう音をまきちらしています。

　うめたてのために、一キロほども遠くなった海岸は、まだまだ遠のこうとしていました。陸と海とのさかいには、沖のしゅんせつ船からひかれている、直径五〇センチほどの鉄パイプが、海水と砂とを、ひっきりなしにはき出して、たちまち陸地をひろげてゆくのです。

　文夫たちは、学校からかえると、夕方まで、ほとんど毎日、この鉄パイプのそばで遊びました。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時によって、パイプからは、水や砂といっしょに、ヒラメやハゼのような小魚だの、ベンケイガニや、コメツキガニなどが、しゅんせつ船にとりつけられた、大きなモーターにすい上げられ、パイプをとおって、はき出されてきます。でも、文夫たちが、そこで遊ぶことは、魚やカニをとることだけがもくてきではなく、みんな、たまらなく海がすきだったからなのです。海の水は、まだつめたい季節でした。でもみんな、あの磯のにおいが大すきだったのです。

文夫は、家の前までかけて行った時、おもわず足をとめて、かばんを、表からほうりこむのをやめました。だれか、よその人がきていて、母と話をしているからでした。

黒っぽい背広の服をきた、よその人は、上がりばたに横顔を見せてこしかけ、母はこちらむきに、たたみの上にすわって、いつもかぶっている、てぬぐいをはずし、ひざの上において、それを見つめているように、うつむいています。

「やあ、おかえり。」

文夫に気づいたよその人は、ふりむくと、そう声をかけてきました。その

人は、町役場の、吉岡というおじさんでした。おじさんの声に、母はだまって、ちょっと顔をあげただけでした。そして、気のせいか、そのとき文夫には、母のようすが、ひどく心配そうに見えたのです。

(――なにか、だいじな話なんだな。)

なんとなく、そう感じた文夫は、そのままうら口にまわると、茶ダンスの上にかばんをのせ、上の戸だなの、ガラスごしに見えるアンパンを一個、つまみ出そうとしました。その時、

「……とにかく、とうちゃんの考えを、きいてみねえことにはなあ。」

という、母の声がきこえました。文夫は、アンパンを包んであるビニールを、やぶりかけていた手をとめて、じっと耳をすませました。

「そりゃあ、そうですよ。働いてくれる本人が、その気になってくれないことにはね。まあ、こんやおかえりになったら、よく相談してみてください。」

吉岡さんは、そう言うと、立ち上がったようです。文夫は、母のようすがいつもとちがうし、顔を合わせたら、なんとなくきょうにかぎって、海に行くことを止められそうな気がしたので、アンパンをくわえたまま、急いでゴム長ぐつをはくと、足音をしのばせて、外にでました。

にわとり小屋のうしろに、二メートルぐらいの、金あみのへいがあり、そのむこうは、鉄工所の材料おき場になっています。文夫は、金あみによじのぼってへいをこえると、水門にむかって、あとも見ずにかけだしました。

そこにはもう、つね平と久作が、バケツをさげて待っていました。このふたりは、文夫の言うことなら、なんでもきくのです。いや、このふたりばかりではありません。クラスのだれもがそうでした。でもそれは、けっして文夫をそんけいしているからではなく、おそれていたからなのです。文夫は勉強もろくにできないくせに、からだが大きく、わん力があって、とても、らんぼうでした。からだのわりに頭が小さく、太い首の上に、チョコンと頭がのっかっている感じです。そんな文夫に、クラスのだれかが、そっと、どんぐりボスという、あだ名をつけました。しかし文夫は、このあだ名を、すこしも気にしていないらしく、そのとおりによばれても、

「おう。」

と、胸をはり、はなの穴をふくらませて、堂々とへんじをするのでした。

# せいそう屋さん

　その日の夕方、うすぐらくなるまで遊んだ文夫が、家にかえったとき、道路工事のしごとに出ていた父も、もうかえってきて、お茶をのみながら母となにか話していました。
　文夫はすぐ、そう思いました。でも母の顔は、（——きっと、役場の吉岡さんのことだな。）
昼ま見たほど、心配そうでもありません。
「おう、はらがへった。」
　そう言いながら、いきなり、ちゃぶ台のそばにすわった文夫は、ふと思いだしたように、
「ねえちゃんには、食べさせたのけ？」
　と、母にたずねました。
「ああ、いま、すんだところだよ。」
　母はそう答えながら、文夫を見て、
「なんじゃね、この子は。ほら、ズボンのひざが砂だらけじゃねえか。はたいてきな。」

ちょっと顔をしかめると、すぐにまた、父にむかって、

「そんなわけで、吉岡さんは、車のうしろから、ポリバケツをのせるだけのことだし、とうちゃんのそのからだでも、じゅうぶん、できる仕事だと言われるんだよ。」

と、言いました。やっぱり父と母は、吉岡さんのたずねてきたことについて、話し合っていたのです。でも、車だとか、ポリバケツだとか、いったい何のことなのか、文夫には、さっぱりわけがわかりません。父は、湯のみを両方の手でつつむように持ったまま、ひどくしんけんな顔で、じっと考えこんでいるようです。

文夫の父は、文夫とまったく反対で、背がひくく、やせていて、女のようにおとなしい人でした。そんな父を、文夫は、とてもものたりなく思っていたのです。

「とうちゃん、また仕事がかわるのけ。」

文夫は、母へそうたずねました。

「うん。ことによったら、役場につとめるかも……な。」

「役場に？　なにをするんだい。」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com